

【多摩丘陵・私の出会った生き物たち10】

< 不思議な種 >

桑原紀子

木枯らしが吹き始めると、林も野原もひっそりと静かです。

虫たちの姿もめっきり少なくなりました。

晴れた日に見かける、翅を広げてお日様を浴びている蝶々は、これからきびしい冬を乗り切っていく越冬蝶たちです。

(もう出会える虫はいないかな……)

と、林の中を歩いて見ました。

目を近づけると、クヌギの幹のデコボコの木肌に、小さな卵が産み付けられていたり、虫の繭の抜け殻が付いていたり、虫の姿はなくても、生き物の気配は濃厚です。

冬を生き抜くために、虫たちは蛹や幼虫、卵、または成虫のまままでそれぞれの工夫をこらし、無事春を迎えたものだけが、新しい生命の営みに参加できるのです。家の中でぬくぬくと冬を過ごす自分がなんだか申し訳ない気がします。

カラスウリの真っ赤な実がいくつもぶら下がっていました。

(そうだ、これで笛を作ってみよう)ポーポー鳴る赤いカラスウリの笛は楽しい晩秋の遊びです。

カラスウリを持って歩いていくと、今度は青い実が数個ずつ付いているアオツツラフジが道端の木に絡まっていました。おまけにムカゴまで

で見つけて(虫には会えなかったけれど、幸運な散歩だった)と家路に着きました。

早速笛作りです。カラスウリの端を少し切って耳搔きで種を取り出します。種はぬるぬるしたものに

包まれているのですが、よくふき取ると黒光りの面白いものが現れます。カマキリの顔そっくりの形なのです。

いつか幼稚園のこどもたちは「いぬのかおだ! 」といました。

次はアオツツラフジの実をつぶしてみると、小さな小さなカタツムリが現れます。いえ、アンモナイトかな? どうしてこんな不思議な形なのでしょう。見れば見るほど個性的です。

カラスウリの笛を吹くと種たちが動き始めそんな気がします。

虫たちは姿を消したけれど、今しか出会えない不思議な種に心を奪われた一日でした。

